

天切り松 闇がたり

浅田次郎

Jiro Asada

闇がたり

天切り松

徳間書店

天切り松 闇がたり

一九九六年七月三十一日 第一刷

著 者 浅田次郎

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

〒一〇五五五 東京都港区東新橋一―一―一六

電話 (〇三)三五七三―〇一―一代表

振替 〇〇一四〇〇―四四三九二

印刷所 長苗印刷(株)

カバー印刷所 真生印刷(株)

製本所 大口製本印刷(株)

定価 一、五〇〇円

定価は帯・カバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は小社またはお買い求めの書店にてお取り替えます。

©Iiro Asada 1996 Printed in Japan

〈編集担当 浅田 暁〉

目次

第一夜 闇の花道

第二夜 槍こすけの小輔

第三夜 百万石ひやくまんごくの薨いらか

第四夜 白縫華魁しらぬいおいらん

第五夜 衣紋坂えもんざかから

201 151 101 51 3

裝幀 田淵裕一
題字 荒川玄二郎

第一夜 闇の花道

その老人が雑居房にやってきたのは、就寝時刻をとうに過ぎた夜更だった。

留置場は、灯りを消すことがない。蛍光灯の光が半分に落とされると、壁はかえって白みを増し、房はしんと冷えてくる。

呼鈴が鳴り、鉄扉が開かれた。看守に背を支えられて、小柄な老人が入ってきた。

「第五房、新入りだ。年寄りだから、奥に寝かせてやれ」

雑居房の鍵を解きながら、看守が小声で言った。二人の留置人たちはごそごと起き出して、ゴザと小さな夜具を手前に詰めた。スチーム暖房は窓ごしの裏廊下に置かれているから、奥はいくらかでも暖かい。

「いえいえ旦那。どこのブタ箱だって、奥は名主なぬしの席と決まっております。どうぞみなさんもお気になさらず」

老人は刺子さしこを打った藍木綿の単衣ひとえを着ており、黒の股引をはいていた。下町の古い職人のような身なりである。

「遠慮するな、とつつあん。あんたから見りやここの地上げ屋ややくざ者なんぞ、鼻クソみたい

なものだろ」

夜具を渡しながら、年配の看守は言った。

「そんなこたアありやせんがね。——すまねえな、にいさん方。起こしちまったかい」

履物を重ねて房の床下に収め、老人は看守から夜具を受け取った。新入りとはいえ、動作は垢抜けている。

「そんなじゃ、お情けに甘えさしていただきやす。ごめんなさいよ」

しつかりとした足どりで敷きつめられた夜具の間を歩き、奥の壁際に膝を揃えて座ると、老人は両拳を床について真白な坊主頭を下げた。

「お情けこうわりやす。十八号、村田松蔵と申しやす。ごらんの通り棺桶に片足つつこんだ老いぼれでござんすが、お見知りおき下さいまし」

いきなり物語から脱け出たような挨拶をされて、若い同居人たちは顔を見合わせた。

看守は金網の外で苦笑した。

「仁義はいいよ、とつつあん。遅いから、もう寝ろ。はい、ご苦労さん」

鍵束を鳴らして看守が去ってしまったと、老人は慣れた手付きでゴザを敷き、身丈も幅もちょうど一人分の小さな蒲団を延べた。そんな動作もいちいち堂に入っている。

「おやすみなさいまし」

老人はまったく規則通りに、仰向いて横になると両掌を毛布の上に出して臉を閉じた。

寝つきの悪い留置人たちは腹ばいになって頭を集めてきた。長い拘留ですっかり退屈しきって

いる地元のやくざ者が、老人に顔を寄せて訊ねた。

「じいさん、何やったの。食い逃げか？ 万引きか？」

目を閉じたまま、老人の口元が笑った。

「そんなふうに見えますかい」

「だっておめえ、この師走の忙しいときにパクられる年寄りなんてのは、たいがいそのどっちかだろうが」

「あつしア、何もやっちゃいません」

留置人たちは声を殺して笑った。

「あにき、そいつは懲役太郎だよ。ほっとけって」

と、地上げ屋が毛布を被って言った。

「何だよ、社長。その懲役太郎って」

ゲーム屋のわか店長が訊ねた。

「まったくおまえは、ばんたびバクられているわりにヤ何も知らねえんだな。つまり、食いつめた懲役志願ってやつだ。年の瀬になるとどのブタ箱にも一人や二人はやってくるんだよ。もつともそんなことは刑事も検事も承知だから、そうそうご希望通り刑務所まで落とすしやくれねえがな。ともかくこうやって何日かは、タダ飯食って蒲団に寝られる」

老人は微笑んだまま、硬い枕の上でごろりと首を傾けた。

「おや、そっちのいさんは、カタギさんかと思つたら、なかなか慣れてらつしやるようですね

え」

やくざ者がいつそう身を乗り出して、地上げ屋のかわりに答えた。

「きょう日の不動産屋はよ、俺たちなんかよりよっぽど悪いんだぜ。地主を事務所に監禁して、ハンコつくまで帰さねえつての。始末におえねえよなあ」

「へえ。するつてえと、例のバブルとかいう、あれですかい」

「そうそう。ま、そのうちあぶくみてえにはじけちまって、にっちもさっちも行かなくなるだらうけどよ。なあ社長、ぼちぼちヤバいんじゃないかねえのか」

「やめてくれよあにき。こっちは深刻なんだから。早いところ釈放ハイクになつて仕事に戻らなきゃ、景気もくそもないんだ」

「いっそパンクさせちまえ。あとは俺が引き受けてやっからよ」

「おたくらじゃ手におえないよ。いま不渡とばしたら、負債は二十億も残る」

「ひえっ、二十億。まったくやくざの出る幕じゃねえよなあ」

やくざと地上げ屋と、若いゲーム屋の店長の顔をぐるりと見回して、老人はにっこりと笑った。「まったく、いやな世の中でございますねえ。どちらさんも虫も殺さぬ善人ヅラをなさつてるのに、こうしてパクられて来なさるからにアそれ相應のヤマを踏んで来なすつたんでしようねえ」

やくざ者が老人の肩を指でついた。

「おうおう、言ってくれるじゃねえかよ、じいさん。俺たちが善人ヅラだったか」

「はい。あつしにやそう見えますが」

「じゃあ、どういふのを悪人ヅラって言うんだ。あ？」

「そりやにいさん、こういうツラを言うんでございますよ」

老人はやくざ者に顔を向けて、もういちどにと笑った。

「どうやらみなさんを起こしちまったようで。新入りのあつしだけが高たか躰しびきてえわけにも行きま
すめえ」

と、老人は身を起こし、毛布を肩に羽織つてあぐらをかいた。小さな足に、紺地の長足袋をは
いている。

「なんだじいさん。地下足袋か、これは」

「いえ、昔の職人はみんなこういう七枚こはぜ袴はかまの足袋をはいたもんです」

「へえ。じいさん職人なんか」

「ま、そんなもんです」

大あぐらをかいて壁に倚よりかかると、老人の体はふしぎなくらい大きく見えた。

「にいさん方、同じ面オモ子ツで長えことお暮しのようですねえ。もつともこの年の瀬になつちや、サ
ツの旦那方も面倒な仕事はなさらねえんでしょう。同じ顔で雑居に十日もいりゃあ、おたがい話
もなくなるつてもんです」

「わかつてんじゃねえか。なあ、何してきたんだよ、もつたいつけねえで話せ。食い逃げか？
万引きか？」

やくざ者は腹ばいのまま老人を見上げた。

ふいに、老人の小さな顔から微笑が消えた。鋭い目付きでちらりと監視台を見、唇をほとんど開かぬ腹話術のような声で、老人は膝元に寝転ぶやくぎに言った。

「おい、若えの。たとえブタ箱の中にせえ、人に物を訊ねるときア、頭のひとつも下げるもんだぜ」

「なんだよ……じじい……」

やくぎ者が返す言葉を呑んだのは、見上げる老人の姿が余りに大きく見えたからである。貫禄——いや威厳とでもいうものが、巖の上にあるような老人のいずまいに備わっていた。

「おめえ、落ちたことあるか」

老人は唇だけで言った。

「え、はい。三年ばかり。新潟から、この春に出てきたばかりです」

「ほう、たいそうじゃねえか。そっちの社長さんは」

低いふしぎな響きを持つ声を向けられて、地上げ屋は身を起こした。

「若いころ、黒羽くろばねに——」

「そうかい。もうひとりのあんたは、まだどこにも落ちちゃいねえな」
はい、と若いゲーム屋は答えた。

「なら、こっちの若兄わかにいいと社長さんは、聞いたことがあるうがよ」

腕組みを解いて斜に構えたとたん、老人の胸の合わせから青々とした彫物が覗いた。少し間を置いて考えるふうをしてから、やくぎ者は弾かれたように起き上がった。老人は指先で襟元をつ

まみ、彫物をちらりと見せた。右肩に重ね松、左の肩から丹頂鶴が白い首を伸ばしている。

「背中にや芒すすきに盆の月だ。表裏あわせて盆と正月、八一やいのカブ。ことの善し悪しも定まらねえよ
うなおめえら駆け出しに、話して聞かせることなんざありやしねえよ」

同居人たちはおぼおぼと、膝を揃えてかしまった。

看守が鍵束を鳴らして金網に寄ってきた。

「とつつあん、また始めるんか」

老人は険しい表情を改め、むしろ甲高いふだんの声で答えた。

「やあ、面目ねえ。なあにね、懲役太郎とまちがわれたんじゃ、自己紹介のひとつもせすばなる
めえと思いやしてね」

看守は振り返って掛時計を見た。

「それなら、俺もここで聞かせてもらおうかな。とつつあんの声はふしぎと監視台まで届かない」
「そりや旦那、今じゃ誰も使わねえが、こいつア闇がたり、つてえ職人の声でござんすからね」

「闇がたり？」

「へえ。六尺四方から先は届かねえっていう、夜盗の声音です。お聞きになるんでしたら、どう
ぞこっちの窓の方へ」

老人は緑色の金網を張った頭上の裏窓を顎で示した。靴音が房をぐるりと回り、通路に面した
窓に看守の現われるのを待って、老人は話し始めた。

低く、抑揚のない「闇がたり」である。

「俺がこうしてパクられたのァ、何もヘタ売ったからじゃねえんだぜ。そのあたり、了簡ちげえはしねえでくれる。幸いこの署長は粹なお人で、こつちが人恋しいの口淋しいのと言やァ、いっただって、泊めてくれる」

「おい、とつつあん。余分なことは言うなよ、署長の立場つてもものもあるんだ」

頭上の金網ごしに、看守が言った。

「へい。承知しておりやす。こちとらべつだん若え者に説教たれるつもりアなかつたんですがね。こいつらの半竹はんちくな善人ヅラを見ているうちに、どうとも辛抱ならなくなつたんで——やい、若えの。こうして噂でもねえ騙りでもねえ本物の天切り松に出会つたおめえは果報者だ。悪党も伝馬町の出入りせえ勝手気儘かまごになるまでにァ、いってえどれほどのヤマを踏まずばなるめえものか、よおつく聞きやあがれ——」

天切り松は片肘を膝に置いて斜に構えたまま、ふしぎな声音で語り出した。

—

大正六年夏——

風の死んだ日盛り、松蔵は父に連れられて四谷塩町の停車場に降り立った。

下谷車坂の長屋から市電を乗り継いでくる間、暑気と人あたりとで幼い松蔵はすっかり酔つた。途中、万世橋と四谷見附の乗り換えのたびに、少年はたまらず灼けた路上に吐いた。

「だから省線にしようって言ったじゃあねえか。信濃町から歩いたってわけアねえんだ」

街路樹の根方に蹲る俣の背をさすりながら、父親は塩町の南の涯てを振り返った。十文字に往き来する人力も荷車も、草色の市電すらも、立ち昇るかげろうに揺らいでいる。

乾いた悪い咳をして立ち上がり、煙草屋で朝日を一箱買うと、父は木蔭で客待ちをする車夫に一本を勧めながら道を尋ねた。

「さ、行くぜ、松。ほら、しゃんとしねえか」

松蔵は生あくびをしながら顔を上げた。

「前を、汚しちまつたけど……」

「ああ、ああ、せっかくの一丁羅がでえなしじゃあねえか」

言いながら父は、汚れた白緋の前と三尺を、腰手拭で乱暴に拭いた。

いつだって銭や物のことばかり心配して、父が体のことを氣遣つてくれたためしはない。母が生きていたころも、やれ臭えだの汚ねえだのと罵つてばかりいた。貧乏のせいで医者に見せられないのは仕方ないとしても、労りの言葉ひとつ口にしない父を、松蔵はどれほど呪ったことか知れない。

「へど吐いてる間があつたら歩け。風に当たれアちつとは気分も治らあ」

父の姿は貧相だった。薄汚れて、てらてらと光った盲縞の尻を端折つて、すり切れた角帯をだらしなく締め、季節はずれのモスリンの鳥打帽を冠つて、父は前のめりに道を急いだ。

かかとのなくなった雪駄は、足を投げ出すたびにちやらちやらと薄っぺらな音を立てた。

「おぶってやりてえところだが、この暑さじゃあとうちゃんが先に参まゐつちまわあ。ぼちぼち行こ
うや」

ときどき立ち止まって松藏を待ち、父は空咳をするたびに手拭を広げて目を凝らした。

「でえじようぶかい、おとつちゃん」

「まったく、かかあもとんだ駄賃を置いていきやがった。それとも何か、惚れた亭主とあの世ま
で、つてことか。冗談じゃあねえよ、こちらはまだまだ遊び足んねえ、飲み足んねえ」

「おとつちゃん。親分の家てえのは、まだ先かえ。おいらもうくたびれた」

「なにいくじのねえこと言いやがる。ほれ、その向かいの谷町の坂を上がってじきの所だ。通り
に出たら何か買つてやる」

右手に士官学校、左手に東京監獄の黒い塀を望む見晴らしの良い石段を下りきると、往来の盛
んな通りに出た。

坂の上がり口の駄菓子屋でラムネを買い、簀すし張りの縁台に腰を下ろすと、父は汚れた手拭を松
藏の襟首に差し入れて背の汗を拭いた。

甲高い声で軍歌を唄いながら、担にんえ銃つうの兵隊が行進してきた。店の前で反対側からやってきた
騎馬の将校に「頭かしら、右」をした顔には、どれもまだ幼さが残っている。

「おとつちゃん、士官学校かい、あれア」

「幼年学校だな。おめえといくつも違やしねえ。青山の練兵場へ行つての帰けえりだろう」
隊列を見送つてから父は言った。